

2017年 高等学校の部 最優秀賞

原点 ～「許す心」～

広島県福山市 盈進高等学校2年生

新貝 彩菜（しんがいはあやな）

「見渡す限り、男も女も目をそむけたくなるようなひどい火傷に全身を覆われていた。・・・大殺戮の光景から目をそらしたかった。だが、それは無理だ。どこもかしこも大怪我と大火傷をした人たちが血だらけで泣き叫び、助けを求めて手を伸ばしていた。焼けただけだ死体の山が私の臉に焼きついた」(35頁)

『8時15分 ヒロシマで生きぬいて許す心』。美甘進示さんの人生が書かれた本。私は今夏、「あの日」からの「許す心」を問うた。まず、今年3月に聞いた被爆体験を重ねた。

切明千枝子さん(87歳)。あの日、切明さんは、ひどい火傷の下級生に「死んでもいい。水を飲ませて」と懇願された。だが、「水を飲んだら死ぬぞ」と衛生兵に言われ、水をあげなかった。下級生はまもなく亡くなった。切明さんは静かに語った。「同じ死ぬのなら、水を飲ませてあげればよかった。後悔している。私は校庭に穴を掘り、下級生の遺体をこの手で焼いたのよ。死体は収縮し、手足が動いていた。そのときの彼女の表情、声、息絶える姿、焼かれる光景・・・今でも全部思い出して心が痛むの。生かされた者の責任として、私は彼女のためにも語るのよ。あなたたち若者を二度と戦争で死なせたくないから・・・」

「生かされた者の責任。」それは、助けられなかった人々に対して「許してほしい」と願う心なのだと思ふ。それは、同時に、切明さんの「許す心」なのだ、私は感じた。

私たちは、被爆者や戦争体験者の「生の声」を直接聞くことができる最後の世代である。戦争の愚かさや平和の大切さを、彼らの声から、肌で感じることはとても価値が大きい。ただ、彼らの証言を聞くことができなくなる日はもうそこまで来ているからこそ、体験記から、自らの学びを深めていくことの重要性を、私はこの本を読んでかみしめた。

私は中学一年から核兵器廃絶のための署名活動に参加している。猛暑の夏も、厳寒の冬も、どんなときでも足を止めて署名をしてくださる方がいる。特に、被爆者やそのご家族の「ありがとう」の言葉は何よりうれしい。

「もう誰にも自分と同じ思いをさせてはならない。」これは、被爆者が異口同音に言う復讐と敵対を超えた素朴で崇高な、人類生存と世界の平和構築のための思想である。また、私たちの核廃絶署名の拠り所である。私は、進示さんの「許す心」をこれに重ねて考える。

「恨み、つらみに重点を置き、未来ではなくて過去にしがみつ়くことには賛成しない。そんなことをしていても、何ひとつ良いことは生まれない。狭い視野で物事を語ってもだめだ。狭い視野こそが、世界を戦争に巻き込んだのではないか」(173頁)。「広い視野」には、自国だけでなく、他国の歴史も学ぶこと。そして、被害の面だけではなく、日本の加

害の面も学ぶことが必要だと、私は思う。

私が通う学校近くにホロコースト記念館がある。私はそこで5年間、館内のガイドボランティアを務めながら、平和をつくるために何が大切かを学び続けている。

「ARBEIT MACHT FREI」（働けば自由になれる）と記された門に入ると、子どもが生死を分けられた120cmの棒、やせ細って骨が出っ張っている男の子、ガス室で殺されたユダヤ人の靴などが山積みになっている写真や遺品が展示されている。ホロコーストでは、アンネ・フランクを含め、150万人の子どもたちが亡くなった。「許さない心」「差別の心」は、罪のない人を無数に殺してしまった。私は、ガイドをしながらいつも感じる。ホロコーストは、ナチスドイツと軍事同盟を結んでいた日本にも責任の一端があるのではないかと。日本は、ユダヤ人に対して加害者ではないのかと。

進示さんは続ける。「私は前を向いていたかった。敵が味方になるのを見たかった。平和がほしかった」（同頁）戦争や原爆により、無念のうちに亡くなった人々、今も苦しみの中を生き抜く被爆者などの思いを受け継ぎ、私も進示さんと同じように平和を希求する。

戦争、原爆、ホロコースト。その悲惨さは抽象ではなく、その中にあった一人一人の命と、それにつながる人々の、一人一人の人生であると、私はこの本に教えられた気がする。

「人を憎んだらようない。」進示さんの言葉が頭から離れない。私たちは、戦争や差別という人間がつくりだした人間に対する悲しき政策や仕業を憎むべきである。反対に、人を憎まず、人を憎まず、人を愛おしみ、人に憎まれず、人から愛おしまれる関係が、平和の礎となるのだと、進示さんは言いたいのではないだろうか。

私は、この本を読んだり、切明さんの体験談を聞いたりして、進示さんや切明さんに、自分が受け容れられ、つながっていると感じ、心が温かくなった。そして、自分が、彼ら彼女たちが築いてくださったこの平和な世の中に生きていられること、すなわち、自分の現在と存在に幸せを感じた。

「許す心。」それは、時を超えても人とつながれる確かな平和構築の原点なのである。